

スターリンの日本認識—一九四五年

横 手 慎 二

初めに——問題の設定

- 一 スターリンの日本についての学習
- 二 独ソ戦期の日本に関する言動
- 三 一九四五年の日本認識

初めに——問題の設定

戦後のソ連の対日政策を考えると、すぐに思い浮かぶのは一九四五年九月二日にスターリンが行った戦勝演説である。その内容は既に繰り返し紹介されてきたが、重要な史料なので、もう一度ここに主要部分を訳出してみる。スターリンは九月二日に次のように述べた。

「わが国に対する侵略を、日本は早くも日露戦争の時の一九〇四年に始めた。周知の如く、交渉が継続中の一九〇四年

二月に、日本はツァーリ政府の弱体に付け入り、突如背信的に、宣戦を布告することなく攻撃を加え……た。周知の如く、当時ロシアは日本との戦争において敗北した。日本は、ロシアから南サハリン「樺太……引用者」を奪い、クリル諸島に定着し、かくして東方においてわが国の大洋への出口をすべて封鎖し、もって、ソヴィエトのカムチャツカとソヴィエトのチュコトの出口と港をすべて封鎖するために、ツァーリ・ロシアの敗北を利用した。日本がロシアから「ソ連領……引用者」極東をすべて奪うという目標を立てていたことは明瞭であった。

しかし、日本のわが国に対する略奪行為はこれで尽きなかった。一九一八年わが国にソヴィエト体制が確立した後に、日本はイギリス、フランス、アメリカがソヴィエト国家に対して当時な敵対的であったことを利用して、彼らに依拠して再びわが国を攻撃し、極東を占領して四年間わが国民を圧迫し、ソヴィエトの極東を略奪した。

しかし、これでもすべてではない。一九三八年、ウラジヴォストークに近いハサン湖地区においてウラジヴォストークを包囲する目的でわが国を攻撃した。翌年には日本は、ソ連領に突入し、わが国のシベリア鉄道を切断し、ソヴィエトの極東を略奪するために、別の場所、つまりモンゴル人民共和国の一地区であるハルビン・ゴール付近に対して攻撃を再度行なった。

確かにハサンとハルビン・ゴール地区における日本の攻撃はソ連兵によって排除され、日本人の屈辱によって終わった。同様に、一九一八年から一九二二年までの日本の軍事干渉も首尾良く排除され、日本の占領軍はわが国の極東地域から駆逐された。しかし一九〇四年の日露戦争当時におけるロシア軍の敗北は、国民の意識の中に辛い思い出として残っている。その敗北はわが国に汚点をとどめた。わが国民は、日本が打ち負かされ、汚点の雪がれる日が到来すること信じて待った。四〇年間、われわれ古い世代の者はこの日を待った。ついにこの日が到来したのだ。今日、日本はその敗北を認め、無条件降伏文書に署名したのである。

このことは、南サハリン「樺太……引用者」とクリル諸島がソ連に移り、これからはソ連を大洋から切り離す手段、われわれの極東に対する日本の攻撃の基地ではなく、ソ連を大洋と直結する手段、日本の侵略よりわが国を防衛する基地となるであろうことを意味する。」

この演説を評して、対ソ情報参謀であった林三郎は「スターリンのメッセージによると、ソ連の対日参戦の目的は、敗れた日露戦争の敵を討ち、南樺太と千島を奪回するにあったことになる。ソ連政府の対日宣戦通告の参戦名目とは、全然違う言い分である。だがこれが彼の本音だったように思われる。彼は、前述のトルーマン米大統領宛て書簡〔四月一六日付書簡のこと……引用者〕のなかでも日本のシベリア出兵に対する仕返しを主張したが、どうやら彼はこちこちの報復主義者だったのではなからうか」と書いている。⁽²⁾ 実際、演説のどこにも、八月八日に読上げられたソ連の対日宣戦布告にある、「ドイツが無条件降伏を拒絶した後に経験した危険と破壊を免れる可能性を日本国民に与える」ためといった高尚な目的に対応する文言はなかった。林の書く如く、演説には率直な復讐論が吐露されており、議論が粗雑なだけに本音を示しているかに見える。しかし本当に、終戦の時点でスターリンの脳裏にあったのは日露戦争の敵を討つという思いであったのだろうか。他の要因は考えられないのであろうか。この点を検討することが本稿の課題である。

一 スターリンの日本についての学習

まず初めに、スターリンは一九四五年までに日本についてどのようなイメージを有していたのだろうか。この点を見ておく必要がある。われわれが史料によって裏付けできるのは、彼が一九三三年から翌年にかけて日本について学習をしていたという事実である。スターリンの書き込みが残る書籍のみを集めたコレクションの中に、一九三三—三四年に出版された、日本を対象とした書籍が三冊だけ見出されるのである。日本を直接題材とした書籍が、このコレクションには他にないことを考えると、また、三冊の書籍の出版年が、おりから日本が国際連盟を脱退して、現状変更志向を鮮明にした時期であることを考えると、スターリンが一九三三年から翌

年にかけて日本について認識を深めようと努めていたと推定しても間違ではないように思われる。実際に、以下に記すように、そのうちの一冊については、別の史料から彼が一九三三年一〇月までに読んでいたことを確認できるのである。

ここで言う三冊の書籍とは次のようなものである。第一は、一九三三年にハバロフスクで、「特別リストによる配布用」として出版された『日本における軍事ファシズム運動』である。第二は、赤軍参謀本部第四部が作成し、同じく一九三三年に出版された『日本海軍』。そして第三が、アイルランド人のオコンロイが著し、ロシア語に訳され、一九三四年二月三日に印刷された『日本の脅威』である。⁽³⁾

これらの本に残る読書跡から、われわれは何を読み取ることができるだろうか。以下順に検討してみよう。第一の『日本における軍事ファシズム運動』は、「日本帝国主義をソ連に対する戦争へ押し進める力のバランスにおいて、軍事ファシズム運動はとりわけ重要な意義をもつ」とする視点から、日本の「軍事ファシズム」の運動とその活動家の思想を分析したものである。⁽⁴⁾ この本でまず興味を惹くのは、スターリンが日本の右翼運動と、その後一九二九年までに出現する「ファシズム運動」との関わりを書いた部分に特別な注意を払っていないという事実である。つまり、彼は明治維新以来の日本の政治が福沢諭吉に代表される勢力と排外的な勢力との対立の中に始まり、やがて大陸への進出について双方の主張が一致していく中で右翼の排外主義的主張が支配的になっていったとする分析について、何の印もつけていないのである。議論に興味がそそれなかつたか、あるいは逆に、彼にとってはごく常識的な議論だったのであろう。これに対して、一九二九年から執筆時期までをカバーする後半部分、正確には一四八ページから最後の三三七ページの部分については、スターリンはまったく対照的な反応を示していた。たくさんのシオリをいれ、さらにあちらこちらに几帳面な赤のアンダーラインを引いたのである。注意深く引かれたアンダーラインから見ても、スターリンが関心を寄せた問題は以下の三点であつたとまとめ

ことができよう。第一は、日本における革命の可能性の問題である。スターリンは明らかに、一九二九年から一九三三年までの経済危機によって、日本は「労農陣営」と「反動的支配グループ」に分かれて熾烈な戦いを繰り広げているとする著者（たち）の状況認識を共有していた。しかし彼は、「まだ地下深くに追いやられている成熟した日本革命」と書かれた部分や、二五〇万人の失業者が生まれているという部分に関心を寄せただけではなく、次のような個所にも下線を引いていた。

「より重要なことは、迫害と政治テロにもかかわらず、労働運動の中に革命勢力のイデオロギイ的成長と組織的結束が見られ、共産党の影響が増大していることだ。こうした主観的要素はまだ客観的な可能性とかけ離れているけれども、支配階級の指導的政治的グループは、成熟しつつある革命との闘いの問題の前に他のすべての問題を後回しにしなければならぬと確信している。これは一九三二年一月の荒木「貞夫」の演説にはっきり表れている。……（一部略）支配階級の中では内的な矛盾がきわめて先鋭になっているが、革命の恐怖が彼らを今のところ接近させているのである」。

非常に慎重に書かれているが、ここに込められた見通しは、目下のところ日本における革命の可能性は乏しいというものであったろう。革命状況が生じつつあるが、支配階級はまだ結束しており、これに対処しているのである。スターリンはこのような判断を共有していたものと思われる。

第二にスターリンが関心を寄せたのは、日本の対外的膨張の可能性についてである。彼は、満州事変以降の日本の軍と政治の指導者が一致して満州を「日本の生命線」として捉えており、この点では何の動揺も見られないという記述に注目し、そこから続く次のような分析にアンダーラインを引いた。

「かくして支配階級の中では、新しい軍事的冒険によって日本を危機から脱出させるといふ根本的問題について形式的な一致に至ったようだ。支配階級のすべてのグループは、中国の掠奪を、もう少し多くのであればソ連領極東の略奪を、いずれにせよ中国における革命運動の根絶のために中国のソ連からの分離を、そして中国市場における日本の

より一層の独占的地歩の確保を、たとえまさに熟しつつある政治的経済的危機が一時的に先鋭になつても、開始しなければならぬという意見で一致しているようである⁽⁶⁾。

この点に関連して注目されるのは、スターリンが、日本軍の士気に深い関心を寄せていた事実である。すなわち彼は、一九三二年から翌年初頭にかけて兵士や新規徴兵者が示した反抗的機運を列挙したくだりで、その一つ一つに下線を引いた上で、「もう一度強調するが、政治的にはこうした気分は目下のところ労働者と兵士の少数を捉えているにすぎない」とする分析に下線を引いていた⁽⁷⁾。彼はまた、日本の海軍と陸軍の対ソ姿勢の違いを分析したくだりも注意を向けていた。特に、海軍は「満州とモンゴルをめぐるソ連と取引する」という提携路線を主張しているが、対照的に陸軍は対米戦よりも対ソ戦の方を望ましいとする論拠を示しているという部分にそれぞれ下線を引いた⁽⁸⁾。おそらく彼にとって、こうした点は確認されるべき重要な情報であつたのである。一言付け加えれば、日本陸軍と海軍の対ソ姿勢の違いについては、かつて酒井哲哉が指摘している⁽⁹⁾。しかし本書の分析は、酒井が描くほど中立的ではなく、日本は対ソ戦に向う可能性が高いとしていた。スターリンもこうした意見を支持していたようで、「日本一国では大規模な「対ソ」戦争に伴う負担や出費を担うことはできない。だから、日本のブルジョアジーの影響力をもつグループは、大戦争への日本一国での参入の道を確信が持てないまま進んでいる。彼らは他の帝国主義国からの日本支援を確保することが不可欠と考えている」というくだりに下線を引いていた⁽¹⁰⁾。スターリンが頼みとしたのは、日本に戦争をするだけの経済力がなく、しかも欧米諸国から対ソ戦で援助を期待できないという状況にあつたと思われる。

スターリンの関心を惹いた第三の点は、日本政治の構造的特徴の問題である。彼は陸海軍大臣現役武官制によって軍部が国家の中の国家となつているという分析に注目し、さらに、「日本における国家権力の階級的メカニズムの秘密は、この権力の恒常的な核心が君主主義官僚と軍閥にあり、そのときの必要に応じて、またかなりな

程度にブルジョア陣営内部の力関係に依じて、権力にあれやこれやのブルジョアジーの派閥を引き寄せていることにある」という部分に下線を引いていた。⁽¹¹⁾ おそらくスターリンは、日本ではブルジョアジーの弱さの故に、権力が軍閥と天皇制官僚に集中しており、そのために後者の意のままに国内勢力が動かされているという著者（たち）の分析に深く印象付けられていた。本書の結論部にある、「反動的シヨービニズムの組織の基本的基盤は、軍部と君主制官僚であり、次に中小の地主、最後に都市ブルジョアジーの反動層だ」という部分に彼がシオリをささみ、下線を引いたのは、シヨービニズムが日本の国論のかなりな部分を覆っているという事実⁽¹²⁾に彼が大きな関心を寄せていたことを示している。

以上からわかるように、本書の読書跡からみて、スターリンの日本に寄せる関心は一般的興味といった類のものではさらさらなかった。彼は実践的な目的をもって、すなわち、どこまで日本はソ連を含む近隣諸国へ膨張する用意があるのかという問題意識を持つてこの本を読んでいたのである。見てきたように、彼は、日本は条件さえ整えばソ連を攻撃する可能性があると理解していた。実は彼は、一九三三年一〇月二一日に、カガノヴィツチとモロトフに宛てて、ソ連と他の諸国の世論を日本に向けるために、新聞や書籍で日本をテーマとしたものをもつと出すように指示を出した後、次のような意見を付け加えていた。

「最近『日本の軍事ファシズム運動』という小本が出た。それは極東向けに、しかも選ばれた者たちだけのために（諜報局）によって出された。何故このような限定をするのか。このパンフレットを、公然と、すべての者に、しかも早急に、ラデックの頭書きと若干の修正を加えて出さねばならない。これは絶対に必要だ」⁽¹³⁾。

この推薦の弁からうかがえるように、スターリンはこの時期までにこの本を読んでおり、しかもそこに示された分析を高く評価していたのである。

書き込み本コレクションにある第二の日本関係の本は、「労農赤色海軍と労農赤軍の幹部に日本海軍について

基本的で必要不可欠な情報」を提供することを目的とした日本海軍論である。⁽¹⁴⁾ 頭書き二ページと本文一四九ページから成るこの本も、スターリンは全編をきわめて注意深く読んでいた。ここで、特に注意を引くのは以下の二点である。第一は、本書の著者は、海軍の建設にあたって日本人が示した組織力と創造性についてきわめて高い評価を与えているのであるが、このような評価をスターリンも共有していたと思われることである。第二は、スターリンがここで将来の日ソ戦によって生じる事態を考えていたという事実である。以下順に見てみよう。

第一の点では、著者たちは、頭書きで、日本が欧米諸国の海軍建設の経験を機械的ではなく、自国の条件に合う形で学習し、短期間に強力な海軍力を保有するにいたったと総括的な評価を与えている。たとえば、次のような具合である。

「計画的な建造と人員の高度な戦闘訓練が、その発展のすべての歴史過程における日本海軍の基本的特徴である」。「海戦場の特殊性の考慮は、水上及び潜水艦隊への魚雷の装備を含む強大な連合艦隊の創設に明瞭に表れている。砲及び機雷にも多大な注意が払われている」。「海軍の人員補充は、海軍司令部の中心的課題の一つである。これは特に、横須賀、呉、佐世保のような海軍司令部について言える」。「海軍航空隊は日本帝国主義が有する軍事力の弱点の一つであった。しかし近年では、この点にも多大な注意が払われている」。⁽¹⁵⁾

スターリンは、以上のような記述にすべて赤鉛筆でアンダーラインを引いた。さらに本文で著者たちが、周知な艦船計画に基づく建造によって、海軍力での比較では一九〇〇年の時点で列強中の最後尾にいた日本が、第一次大戦期には第四位となり、ワシントン会議までにイギリス、アメリカに継ぐ第三位になったと記述すると、これを確認するように、それぞれの文章で、第三位、第四位という個所にアンダーラインを引いた。⁽¹⁶⁾

著者たちによれば、日本海軍は、技術スタッフを重視して多数擁していること、潜水艦の建造を重視していること、艦船の建設にあたって「厳正な首尾一貫性」を示して「前の時代に見られたすべての欠陥が後続で改善さ

れる」よう注意深く行動していること、あるいは「最も適切なタイプの艦船のシリーズ生産」を行って、「製造と供給の標準化を進め」ていることなどにその特徴を有していた。著書たちは日本人の努力を賞賛するようにこうした記述を書き連ねているのであるが、スターリンはそれぞれの個所に一つずつきちんとアンダーラインを引いた。¹⁷⁾明らかに彼は、著者たちと同様に、海軍の創設と増強において日本人が示した創意と計画性、さらにそれを着実に実現する能力に強い印象を受けていたのである。

もちろん以上の指摘から、本書に日本海軍の否定的な側面が記述されていないと考えるべきではない。本書には知られる限りの否定的現象が挙げられていた。すなわち、一年に八回から一〇回、勤務拒否や逃亡が起こること、僅かながら自殺者が出ること、一年に一〇人から一五人ほど共産主義思想の嫌疑者が発覚すること、一五人から二〇人の犯罪者が出ること、さらには、艦隊で行われている私的制裁のことなどが記述されている。こうした点もスターリンはアンダーラインを引いて読んでいた。しかし最終的に著者たちが、こうした否定的現象にも関わらず、「日本海軍の要員は、質的には疑いもなくイギリスやアメリカよりも高い」と総括すると、スターリンはこの総括部分に下線を引くのを忘れなかった。¹⁸⁾彼がこの結論に同意していたことは疑問の余地がなかった。

本書の書き込みで第二に注目すべき点は、日ソ戦の事態を想定して注意深く読まれていたという事実である。そのことは、スターリンが次のような個所に下線や横線を引いていた事実からうかがうことができる。

「海管区の基本的な任務は、連合艦隊の活動の保障である。この課題を遂行するために、海管区司令部は強力な人員を擁している。管区の敵国の侵入からの防御は二義的課題である。このことは、日本海軍司令部が、自国沿岸からはるか遠方において敵国の艦隊に主要打撃を与える意図をもつことから明らかである。舞鶴と大湊管区は、艦隊の作戦基地としてソ連沿岸への上陸作戦を可能にすることをその課題として¹⁹⁾いる」。

「佐世保基地管区は、他の二つの管区（呉と横須賀）と比較すると、日本艦隊のあり得る作戦行動との関係できわめて

重要である。佐世保管区は、中国での作戦とソ連攻撃に関連して特別な意義を帯びている。佐世保の意義は、日本海とシナ海からの敵国の侵入に対する防衛で果たす唯一の軍事基地という意味を考慮すれば、さらに明瞭になる⁽²⁰⁾。

日本の一般船舶は「圧倒的多数が近海にある。このため戦時になれば、これらのほとんどがほんの僅かな例外を除き、開戦、もしくは動員の宣言後、およそ六日から七日で母港に戻って来ることができる」。これらの船舶は引揚げ後すぐに「中国やソ連、さらにはフィリッピンに対する上陸作戦」に利用できる⁽²¹⁾。

以上の三つの文章にスターリンが下線を引き、最初の文章には下線ばかりか横線まで付した事実は、彼が、来るべき日ソ戦において日本艦隊が示すであろう具体的行動を想定しながら本書を読んでいたことを示している。

最後に、第三の著作を見てみよう。ここでは、記述に対するスターリンの反応はこれまでのものと異なっていた。オコンロイの『日本の脅威』は精神面から日本を捉えようとした軽い読み物という性格をもっており、スターリンの関心も一般的な日本人像を得ることにあったようである。しかし興味深いことに、前半分には熟読の跡を残しているのであるが、半ば以降になると下線も書き込みもまったくなくなるのである。つまり、熱心に読み始めたが、本書の次第に興味本位に走る内容に不満を覚え、途中で投げ出したように見えるのである。

この本に残された読書跡で何よりも興味を引くのは、日本人の全般的性格について書かれた厳しい評価に、スターリンが同意と不同意の入り混じる反応を示していた事実である。著者によれば、日本人は血を好む野蛮な国民であった。また、日本人が世界に脅威となるのは、自分たちには世界を支配する神与の権利があり、自分たちが世界の民族に優越するという確信を持っているからであった⁽²²⁾。スターリンも、日本人が全般的にこのような性格を持っているとする著者の見解を支持していたと見られる。彼は、日本人の人種論的偏見を描く記述に下線を引いたばかりか、次のような文章の欄外の部分に「日本」という書き込みを加えたのである。

「彼らが神の子供であり、日本は神である天皇に支配された神の国であるという意識によって、日本人はそのひどい困

窮に堅忍不拔の気持ちで耐えることができる。生まれたときから日本人は、愛国心こそ神たる天皇に対する第一の義務であり、日本はますます強大となり、時とともに世界の支配者になると吹き込まれているのだ。⁽²³⁾

スターリンは、さらに、著者の神道論にも強い関心を寄せた。ここで著者は、日本人が信じる神道では「天皇は国と民族の最高の支配者」であり、「天皇は、神道の中心的存在である。彼は同時にさまざまな宗教的儀式においてすべての神を具現化する存在として崇拜される対象なのである」とし、こうした神道を理解することは日本人を理解する上で不可欠だと主張していた。著者によれば、「神道が生きている限り日本は存在し、神道が死ぬれば日本も滅びる」のである。スターリンはこうした分析にかなり興味を覚えたようで、この部分に下線を引き、欄外に「これが日本の顔だ。興味深い神道の解釈ではないか？」と書き込んだ。⁽²⁴⁾

しかしさらに興味深いことに、スターリンの賛同はここで止まっていた。彼は、日本人が知的に劣っているという著者の見解を受け入れなかった。本書の中盤で、著者は禅宗の面壁三年の例を示し、「既に書いたように、国民の知的な発達はきわめて低い」と断定したが、他ならぬここにスターリンは疑問符を付したのである。⁽²⁵⁾

本書はこの後、日本社会の性風俗や男女関係をかなり詳しく記述している。これにスターリンは、「ひどい」とか「けがわらしい」とかという書き込みを加えた。⁽²⁶⁾ 事実、著者の記述はこの種の叙述においてきわめて扇情的であった。注目されるのは、一通りこうした記述が続く部分に上記の如き書き込みを残した後に、スターリンが書き込みも下線もまったくなくそのままに本を置いている事実である。具体的には、前半分にはたくさんの書き込みがあるのに、後半部分の一〇四ページから二一五ページまでの間には何の印もつけられてないのである。スターリンはどうやら、日本人のファナティクなまでの天皇信仰とその信仰に支えられた犠牲的精神に強い関心を示したが、それ以外の記述には満足しなかったものと思われる。

以上の三冊の著作に対するスターリンの反応は、彼が一九三三年から翌年に日本に強い関心を抱き、自身の日

本認識を深めていたことを示している。彼の置かれた状況を考えれば、日本についての本を三冊しか読んでいないというよりも、三冊も読んでいたと評すべきであろう。ともあれ、こうした著作を通じてスターリンが日本人について持ったイメージは、一方で、革命状況にありながらも天皇周辺勢力によってがっちり掌握されており、他方で、周到な計画力と実行力を持ち、フアナティックなまでに天皇に帰依する人々というものであったろう。彼は間違いないようにした日本人を、知的に劣るどころか、優れた資質を持つ、侮りがたい敵とみなしていたのである。

それではこうしたイメージは、具体的な政策にどのように反映したのか。スターリンの姿はこの後、対日政策の要所所において認めることができる。たとえば、一九三五年の東支鉄道売却問題、同年から翌年にかけてのモンゴル政策、一九三七年のソ連領極東からの朝鮮人追放政策、張鼓峰（ハサン湖）事件、ノモンハン（ハルヒン・ゴール）事件、そして一九四一年の日ソ中立条約締結時の松岡洋右への対応などである。これらの事件はいずれも重要であるが、まだ史料の開示状況に恵まれておらず、各々かなりの推論を重ねなければならない。ここでは紙幅が乏しいこともあり、いきなり独ソ戦開始以降のスターリンの日本に対する言動を追うことにしたい。

二 独ソ戦期の日本に関する言動

一九四一年六月二二日にドイツの対ソ攻撃が始まると、スターリンが直面した最初の問題は、極東配備のソ連軍を日本側に気づかれぬように独ソ戦線へ送ることであった。彼が兵力を西部に送ったことは確かであるが、いつ、どの程度西送したのかという点は、まだ史料に基づいて論じることができない。さしあたり、独ソ戦開始以降で史料的に最初に確認できるスターリンの日本論は、一九四一年一二月半ばのそれである。周知のごとく、こ

の時訪ソしたイーデン外相に対して、スターリンは独ソ戦前のソ連国境を正式のものとして承認するよう迫った⁽²⁷⁾。こうした議論が暫く続いた後に、極東情勢が話題にのぼったときに、スターリンはきわめて大胆な発言を行った。つまりスターリンはここで、初戦の勝利にも関わらず、日本は数ヵ月後には崩壊するという強気の見通しを述べたのである。そしてイーデンに対して、この見通し通り進み、またソ連軍がドイツ軍を西方に押し戻したら、イギリスはたとえばバルカンに第二戦線を開くことができるかと尋ねた。この強気の展望に驚いたイーデンは、もちろん第二戦線の問題を協議する用意があると答え、すぐに、本当に日本が数ヵ月後に崩壊すると考えているのかとスターリンに問い直した。これに対するスターリンの回答は次のようなものであった。

「実際にそう考えている。というのも、日本は非常に憔悴しており、長くは持たないからだ。もしこの上、日本が中立「条約……引用者」を破つて、ソ連を攻撃すれば、日本の終末はもっと早く来るだろう」。「そのような可能性はけっしてないとは言えない」⁽²⁸⁾。

このような強気の見通しがどこからでてきたのか、説明する材料は目下のところない。しかし、当時ソ連側がモスクワ近郊で初めてドイツ軍の侵攻を食い止めるのに成功したこと、そしてこれに続いて翌年早々から、スターリンが一気にドイツ軍を駆逐しようとして試みたことを考えると、最初の勝利に浮かれたスターリンは自軍の力を過大評価して、このように強気になったのかもしれない⁽²⁹⁾。もう一つ考えられる解釈は、スターリンはイギリス側に第二戦線を早急に形成させるために、東アジアの状況を過度に楽観的に描いたというものである。既に厳冬期を迎えて、日本のソ連攻撃はあつたとしても翌年春以降でしかあり得ないことを考えると、スターリンがイギリスの注意をヨーロッパ戦線に集中させようとして、意識して日本の力を過小に評価した可能性がないとは言えないのである。いづれにせよ、以上のような日本評価はそのままソ連側にいつでも日本と戦う用意があるということと意味しなかった。一二月二〇日に再度イーデンが、ソ連軍の対日参戦は来春になされると考えてよいのかと

問いたですと、スターリンは次のように答えたのである。

「もしもソ連が日本に宣戦を布告すれば、ソ連は陸海空における真の、重大な戦争をしなければならなくなる。これはベルギーやギリシアが日本に宣戦布告をするのとまったく違う。ソ連政府は綿密に可能性と力を計算しなければならぬだろう。現在のところ、ソ連はまだ日本と戦争をする準備はない。我が方の極東軍はそのかなりの数が最近西部戦線へ送られた。現在極東では新戦力が形成されつつある。この地域でソ連がしかるべく準備をなすまでには、四カ月を下回らない時が必要だ」。「もし日本がソ連を攻めれば、はるかに良い。わが国に、もっと望ましい政治的・心理的雰囲気は創りだされるだろう」⁽³⁰⁾。

ここに明らかのように、この時のスターリンの日本についての議論は首尾一貫性を欠いていた。一方で日本の脅威を感じていない、攻撃されれば好都合だと主張しつつ、他方では、ソ連は今すぐに対日戦争をする状態ではないと認めざるをえなかった。そもそも日本が数カ月後に崩壊すると言うのであれば、ソ連は日本と戦うのに四カ月も準備を整える必要はないはずであった。この時スターリンは、日本について整理された意見を有していなかったと言わなければならない。

スターリンが日本について語った次の機会は、翌一九四二年八月であった。この時、ハリマンは大統領特使としてチャーチルとともにモスクワを訪れた。第二戦線形成の遅れを説明するためである。ここでハリマンが、アメリカ大統領は日本を太平洋で手一杯にして、シベリアへ侵入する気をおこさせないようにするつもりだと言うと、スターリンはそれはたいへん助かると答えた。続けて二人の間では次のような会話がなされた。

「私「ハリマン」は、その他では太平洋で何が役に立つかと聞いた。彼「スターリン」は、もっと飛行機が欲しいと言った。私はどこでだと尋ねた。彼は日本海だと答えた。それは彼が（アメリカの爆撃機の基地として）シベリアを開放しなければ不可能だと私は説明した。彼は強く、『それはだめだ、アラスカから行くのだ』と言った。私は、それでは遠すぎると説明すると、彼は再び、アラスカはB二四で日本を爆撃するのに十分近いと繰り返し続けた。私は議論しても仕

方がないと考え、『ソ連とアメリカの飛行機が一緒に日本を攻撃する日が来れば、すばらしい』と言った。彼は夢中になって、日本爆撃に乾杯だといって杯を傾けた⁽³¹⁾。

このエピソードが起こった時点を考えれば、発言が通り一遍のものではないことがわかる。ソ連はこのときまさにスターリングラードに突き進むドイツ軍との対決を控え、急ぎ市民を疎開させていたのである。この状況で、彼が、ソ連はまだ日本と直接戦争する状況にはないと判断し、日本の攻撃を招きかねない行動を慎重に回避したのは当然であった。しかしまさにそうした時期に、スターリンは日本との戦争が不可避であると考えていたのである。それは彼の確信となっていたものと思われる。ここで前年末のイーデンとの会談と比較すれば、そのとき述べた日本についての見通しがすっかり影を潜めていることがわかる。そのときの日本評価は、先にのべたように一過的なものにすぎなかったのである。その一方で、将来の日ソ戦争を不可避と見ている点では彼は一貫していたのである。

スターリングラードの戦いにおけるソ連軍の勝利が確定した一九四三年の春になると、日本との戦争に備える措置が密かに取られた。五月二一日、国家防衛委員会は、コムソモリスクとソヴェツカヤ・ガヴァ二間の鉄道建設の決定を採択したのである。この決定の事実を史料によって確認したキリチェンコが言う通り、それは日ソ戦が勃発すれば、日本側がシベリア鉄道を切断する行動にでることを想定し、予め補助線を確保するためのものであったと考えられる⁽³²⁾。ただし、ここでの措置がはたしてソ連側から参戦することを想定していたものか、あるいは日本からの攻撃に備えたものかはこの事実からだけでは判然としない。双方の意味があったと考えるべきだろう。

結局、スターリンが対日参戦の意図を明瞭に示したのは、周知の如くこの年の一〇月三〇日のことである。このときハル国務長官をクレムリンに迎え、スターリンは西側同盟国がドイツを破ったときにソ連は日本との戦争

に参加すると告げ、これを極秘でローズベルトに伝えるように言ったのである。ハルが書きとめるごとく、この時彼は対日参戦に何の条件もつけなかった。そしてその晩餐会の終わりに、ハルを別室に招き、一九一八年のシベリアにおける赤色パルチザンと日本軍との戦いを描いた映画と一緒に観賞したのである。ハルは、この映画が一九三八年に公開されたときに日本大使館から抗議を招いたものと書いている。これはその時ソ連側から受けた説明の受け売りであろう。⁽³³⁾ スターリンは、ソ連国民が日本と戦う理由があることを示すために、このような特別の設定をしたのであろう。以上からみて、スターリンはこれより大分前に対日参戦を決定しており、決定を告げる時期を待っていたのであろう。実際スターリンは、既にこの年七月の時点で、駐米代理大使グロムイコからアメリカ側がドイツ敗北後のソ連の対日政策について強い関心をもっているという内容の報告を受けていたのである。⁽³⁴⁾

一九四五年八月のソ連参戦の際に極東ソ連軍総司令官に任命されるワシレフスキーは、幾分曖昧さが残る形で、テヘラン会議の後の一九四三年末に、「可能性があることを自分は知らされていた」と書いている。⁽³⁵⁾ 直接スターリンから何らかの指示が出ており、回想執筆時期にはその公表が許されなかったと考えるべきであろう。ドイツとの戦いはまだ一年余り続くのであるが、ソ連軍はゆっくりと対日参戦に向けて動き出したのである。⁽³⁶⁾ スターリンの準備は周到であった。一九四四年三月三十一日、ソ連軍大本営はスターリンとアントーノフの連名で指令二二〇〇六一号を発し、太平洋艦隊と北太平洋小艦隊、及びアムール赤旗小艦隊は極東司令軍司令官に服属すべしと命じた。⁽³⁷⁾ 日本との戦闘の火蓋が切られたときに、まず戦闘に入る海軍の命令系統を確立したのである。スターリンの日本論としてこの後に出てくるのが、一九四四年一月六日の革命記念日演説である。既に指摘されている通り、この時スターリンは、日本を公然と侵略国と呼んだ。当時の日本外交官はこの演説を評して、「従来日本を刺激することを避けてきたその態度をかなぐりすて」たものと書いているが、それは必ずいぶん甘⁽³⁸⁾

い判断である。スターリンから見れば、刺激を避けていたのは前年までで、この時にはさらに進んで日本を挑発するほどの気持ちであったと思われる。いずれにせよ、そこで重要なのは、日本を明瞭に侵略国と呼んだことばかりではなく、そこに次のような言葉を挟んでいたことである。

「ドイツは敗北後に、もちろん経済的にもまた軍事政治的にも武装解除されるだろう。しかしながら、彼らが自国の力を回復し、新しい侵略を行おうと努めないと考えるとすれば、素朴すぎるであろう。ドイツの首謀者たちが、もう今から新しい戦争を準備していることは周知のことである。歴史は、ドイツが二〇年から三〇年の短期間で敗北から立ち直り、力を回復するのに十分であることを示している。ドイツからの新しい侵略を防ぐために、あるいはそれでも戦争が起こつたら、それをごく初期に押しつぶし、大戦争に発展させないためには、どのような手段があるのだろうか」⁽⁹⁾

このすぐ後に、日本も侵略国だという部分が続くのである。引用した言葉は、既にこの時期にスターリンが戦後世界におけるドイツの脅威について考えをめぐらしていたことを示している。日本をドイツの友好国と見なしていた彼が、同じように戦後世界における日本の脅威について考え始めていたことは十分にあり得よう。

一九四五年二月に開かれたヤルタ会議で、ソ連は正式に、ドイツ敗北後二、三カ月の内に対日参戦を行うことを約束した。先に引用したワシレフスキの回想によれば、極東での戦争に備えて、三月から四月にかけて大量の武器と資材が送られた。その後人員が大量に極東戦線に送り込まれた。⁽¹⁰⁾ エローニンのモノグラフに付けられた付表によれば、ソ連軍は一九四五年一月一日から八月九日までに五六万七三〇〇人を増加させ、最終的には一五七万七七〇〇人を対日作戦のために結集したのである。⁽¹¹⁾ 一説によれば、関特演で日本軍が集めた兵力が七〇万人と言われているので、この数字はソ連側が、なかなしくスターリンが、日本軍の力をきわめて強大だと見積もっていたことを示している。彼らは、関東軍がかつての精鋭部隊ではなくなっており、戦争が楽勝に終わるなどとは全く考えていなかったものと思われる。

総じて言えば、スターリンの日本イメージは、一九四一年の発言でこそ一部修正されたかに見えたが、その後においては、日ソ戦争を不可避と見る点でも、またひとたび戦争になれば日本が侮りがたい強敵になるだろうと考えていた点でも、一九三〇年代半ばから一貫していた。一九四一年の発言にしても、そのまま理解してよいものか疑問が残るほど整合性を欠いていたことは指摘した通りである。それではこうしたイメージは第二次大戦の終末、そして戦後にかけて変化したのであるうか。次にこの点を見てみよう。

三 一九四五年の日本認識

ソ連側が一九四五年に日本をどのように評価していたのかという問題に対する回答は、一九九三年にアメリカの歴史家キャサリン・ウエザスビーによって示されたことがある。彼女によれば、ソ連外務省の第二極東部の外交官が一九四五年六月二九日付で提出した朝鮮問題に関する文書を見ると、きわめて明瞭に、彼らが、将来の日本の脅威をどのように排除するかという問題に取りつかれていたことがわかるという。彼女は次のように続けている。

「作成者たちが、朝鮮におけるアメリカや中国の利害について言及しているとは言え、日本を主要な敵と見続けている点は注目すべきであろう。以下に示すように、この日本からの脅威は、「朝鮮」占領期間、さらには朝鮮戦争の第一年目まで焦点であり続けた⁽⁴²⁾」。

ウエザスビーはこの主張を証拠立てるために、一九四五年九月付のソ連外交文書と同一二月付の外交文書の内容を紹介している⁽⁴³⁾。これらの文書も、この時期に文書作成者たち(ソ連外交官たち)が、将来の日本を、ソ連に對する脅威の源泉とみなしていたことを示している。この主張そのものは、本稿の結論と変わらない。しかし、

こうした文書を評価するにあたってウエザズビーが以下のように書くとき、それは事実と異なっていたと言わねばならない。すなわち彼女は、「中央委員会と外務省文書館の文書は、この時期のソ連政府の中に自由な意見の流れなどあり得ないという長く考えられてきた仮定を確認している。自分の検討した数百のファイルには、何らかの政策論争を示す文書はまったくなかった。従って、外務省内で流れているこのようなレポートは、上層部の意見を反映している……と結論しても差し支えないであろう」と書いているのである。⁽⁴⁴⁾

つまり外務省の文書に見られた将来の日本に対する危惧は、スターリンのものであったと考えて構わないというのである。しかし実際には、第二次大戦の間、ソ連の対外政策機構の中では対日本政策をめぐって多様な政策提言が出されていた。⁽⁴⁵⁾ 従って外交官の書いたものがすべてスターリンの意図を示していたとは言えないのである。そこで、われわれが問題としている一九四五年のスターリンの日本観を知るためには、彼自身の考えを示す文書を見出す必要がある。実はこうした文書の一つが一九九〇年に石井明教授によって示されていた。石井教授によれば、スターリンは、一九四五年七月七日に中華民国行政院長の宋子文に対して次のように述べたというのである。

「日本は敗北するであろうが、二〇年ないし三〇年後にはその力を回復させるであろう。我が方のすべての、中国に対する全般的計画はこの点に基づいて立てられている。極東で日本が再び勢力を回復させようとしていることに対処する、ソ連の準備は実際のところ不足気味だ。我が方はウラジオストクに港をもっているが、これは完全無欠な港とはいえない。そのほかにソビエツカヤ・ガワニを建設中だが、今のところまだ港ができあがっていない。第三の軍港としてカムチャツカのペテロバヴロフスクがあるが、現在ある鉄道と連結させるには二五〇〇キロの鉄道を敷かねばならない。我が方は二〇年ないし三〇年の年月をかけてペテロバヴロフスクの設備を整える必要がある。そのほかにもデ・カストリ港があるが、そこにも鉄道をひかねばならない。極東におけるソ連の国防システムを完成させるためには、バイカル湖

以北にシベリアを横断する鉄道を築かねばならない。これらの件はどれもこれも四〇年の年月が必要だ。だから我が方は中国との同盟が必要なのだ。この期間は満州で若干の権益を確保するが、期限が満了すれば、我が方は満州の権益を放棄するつもりだ。外モンゴルの独立もこの計画の一部なのだ。モンゴルが独立しなければ、我が方は兵を進駐させることができないのだ⁽⁴⁶⁾。

ここにあるように、スターリンは日本の敗北が目前に迫っている時期に、二、三〇年後には日本が再生する可能性が高いとし、そのときに備えて今から多様な策を講じていると述べたのである。はたしてこのような認識は彼の真意を反映したものであったのか、あるいは、たんに別の目的のためになされた一過的議論に過ぎなかったであろうか。周知のごとく、ソ連が、ヤルタ会議で約束された中国における権益を確保するためには同会議に参加しなかった中国政府の同意を必要とした。従って、ヤルタでの成果を現実のものとするためには、スターリンは中国側にことさらに将来の日本の危険性を吹聴するだけの理由があったのである。

しかし、その後明らかになるように、スターリンの日本脅威論はこれに限られなかった。終戦から四ヵ月あまり経った一九四五年二月三〇日に、蔣介石の個人的代理として訪ソした蔣経国に対しても、彼は同様の日本脅威論を展開したのである。会談録から関連する部分だけ訳出してみよう。

「蔣経国は、スターリン大元帥は日本をどう扱ったらいと考えているか、その意見を蔣介石がうかがいたがっていると聞いた。

同志スターリンは述べた。目下東京に対日理事会が創設されている。アメリカ人はこれを望んでいなかった。すべてが、連合国理事会の創設提案を擁護したソ連に反対した。

モロトフが指摘した。ロンドンでは王世杰がこの提案に共感を示した。しかしロンドンで討議されないことを望んだ。同志スターリンは述べた。今ではことはうまく進んだ。東京に連合国理事会が創設され、そこで蔣介石によって提起された問題を解決することが必要になろう。ソ連政府について言えば、ソ連政府は日本から兵器を剝奪するばかりか、

日本における、戦艦と兵器を生産する工業部門を廃絶することに賛成である。このような観点をソ連政府は有している。ソ連政府は、日本軍を捕虜としないアメリカ人と意見を同じくしていない。ソ連政府は日本軍を捕虜とした。彼、同志スターリンは、アメリカ人に、マッカーサーは日本軍の将官団、すなわち陸軍の將軍、提督、空軍の將軍を、少なくとも八千—一万人から一万二千人を逮捕する命令を出すべきだと言った。目下アメリカ人は、一人ずつ彼らを裁いている。アメリカ人はソ連政府と異なる判断をしている。アメリカ人は今や日本に対して、先の世界大戦後にドイツに対してとったのと同じ態度をとっている。回国では将校団と将官が保持された。彼、同志スターリンは、何度かアメリカ人に、日本軍を捕虜にするように言ったが、彼らはこうした人々を連れて行くところがないと答えている。いずれにせよソ連政府は、日本に将官が残らないようにするつもりだ。これがソ連政府の政策である。

蔣経国は、中国人民は日本人のことをけっして忘れないと指摘した。

同志スターリンは、中国人民が良いが、中国の指導者も良くなければならないと言った。

蔣経国は、スターリン大元帥は日本が再起することがあり得ると述べたと記憶している、と発言した。

同志スターリンは答えた。もちろんそれは起こり得る。というのは、日本は数が多く、復讐心の強い民族だからだ。日本は再起を願っている。これを阻止するためには、五〇万から六〇万人の将校と一万二千人ほどの日本の将官を捕虜にする必要がある。同志スターリンは言った。アメリカ人は日本による占領を経験していない。だから彼らはすべてを理解できないのだ。中国は日本の占領を経験した。ソ連はドイツ人の「占領」と、以前に日本人のそれを経験した。だから中国とソ連は、敵をもはや戦えない状態にすることが必要だと理解している。アメリカ人はこのことがわからないのだ。彼、同志スターリンは、彼らがそのことを理解することを願っている。

蔣経国は、目下日本では警察はどうなっているのかと尋ねた。

モロトフが、日本では日本人の警察があると答えた。

蔣経国は、日本人は警察を軍隊に変えるかもしれないと言った。

同志スターリンは、日本人はもちろん、警察の中にその将校層を保持しようとするだろう。しかしソ連の代表が日本に行けば、そうしたことに終止符が打たれるよう努めるだろうと言った。⁽⁴⁷⁾

ここから明らかのように、スターリンは、日本が敗れて四ヵ月あまりも経った後にも、以前と変わることなく、日本に対する強い警戒心を示していたのである。われわれは、このような分脈の中に本稿冒頭に示した九月二日のスターリンの戦勝演説を置く必要がある。これまでの議論では、日露戦争の雪辱という部分にこそスターリンの本音があると評価されてきた。しかし少なくとも、演説の次の部分にも彼の本音が示されていたとみなす理由がある。⁽⁴⁸⁾

「このことは、南サハリンとクリル諸島がソ連に移り、これからはソ連を大洋から切り離す手段、われわれの極東に対する日本の攻撃の基地ではなく、ソ連を大洋と直結する手段、日本の侵略よりわが国を防衛する基地となるであろうことを意味する」。

明らかに、一九四五年の二度の発言も、そしてメッセージのこの部分も、将来の日本とソ連が戦うことになるという危惧を共有しているのである。異なる点はどこか。最初の七月七日の発言では、スターリンは将来の日本の脅威に備えて、中国内にソ連が権益を持つ必要があると述べた。そして一二月の蔣経国に対する発言では、彼は、日本の軍人を捕虜にすることが、この目的のために必要なだと述べた。しかしここでは、南サハリンとクリル諸島が、将来の日本の侵略からソ連を守る手段になるというのである。

長い間、戦勝演説のこの部分が無視されてきたのには、それなりの理由がある。もしもスターリンが、クリル諸島が将来米ソの角逐の場となるから、いち早く確保したと言ったのであれば、この部分はずっと以前から重視されたであろう。既に一九四五年九月の時点で、米ソの間では冷戦ではないにしろ、確かに厳しい戦略的ゲームが始まっていたからである。しかしメッセージは、まさに日本が戦争に負けて廃墟の中にある時に、日本の軍事

的再起を想定して、ソ連は断固として行動する必要があったと述べているのである。それはあまりに歴史の方向を読み間違えていた。日本は軍事的な大国として再起しようとはしなかったのである。その意味では、スターリンの歴史観の偏向を物語る良い例としてこの事実は記憶されるであろう。しかし彼が、林三郎が説くような人物でなかったことも確かである。彼は、雪辱のために戦争を行った「こちこちの報復主義者」でも、また、領土を膨張したいがために戦争を行った法外な膨張主義者でもなかった。どのように彼の歴史観の偏向を説くにしても、彼が将来起こるはずの日本の脅威を憂え、強い決意をもって「予防的に」行動していたという事実は否定できないからである。一九三三年と翌年の日本学習が、彼をそこに導く上で大いに意味があったことは確かであろう。

- (1) *Pravda*, 3 sent.1945.
- (2) 林三郎『関東軍と極東ソ連軍』（芙蓉書房、一九七四）二八六～二八七ページ。なお一般向けに書かれた歴史書として比較的よく読まれているとされる以下の中でも、スターリンの意図は日露戦争の雪辱にあったとし、このメッセージで「もうドイツにも日本にも脅かされることはなくなった」とスターリンは誇らしげにいったのである」と結んでいる。半藤一利『ソ連が満州に侵攻した夏』（文藝春秋、一九九九）、三〇五～三〇六ページ。
- (3) 書名は順に『*Boemo-fashiskoe dvidenie v Iaponii* (Tip. Dal'nepartizdata: Khabarovsk, 1933), *Voemno-morskoe sily Iaponii* (Izdanie IV upravlenie shtraba RKKA: Moskva, 1933), *T. O'konvoi, Iaponskaiia ngroza* (Gos. sotsial'no-ekonomicheskoe izdatelstvo: Moskva, 1934)。
- (4) RGASPI, f. 558, op. 3, d. 49, l. 3.
- (5) Tam zhe, l. 150-151.
- (6) Tam zhe, l. 160.
- (7) Tam zhe, l. 170-171.
- (8) Tam zhe, l. 174-175.

- (9) 酒井哲哉『大正デモクラシー体制の崩壊』(東京大学出版会、一九九二、一八四～一九〇ページ。)
- (10) RGASPI, f. 558, op. 3, d. 49, l. 176.
- (11) Tam zhe, l. 183-184.
- (12) Tam zhe, l. 325.
- (13) *Stalin i Kaganovich, perepiska, 1931-1936* (Moskva: POSPEN, 2001), s. 396.
- (14) PGASPI, f. 558, op. 3, d. 48, l. (本書の頭書きにはリスト番号がついてない。)
- (15) Tam zhe, l. II.
- (16) Tam zhe, l. 3, 4.
- (17) Tam zhe, l. 18, 69, 70.
- (18) Tam zhe, l. 33.
- (19) Tam zhe, l. 21.
- (20) Tam zhe, l. 108.
- (21) Tam zhe, l. 138.
- (22) f. 558, op. 3, d. 98, l. 24-25.
- (23) Tam zhe, l. 40-41.
- (24) Tam zhe, l. 50.
- (25) Tam zhe, l. 54.
- (26) Tam zhe, l. 60, 77, 90.
- (27) Voitech Maslmy, *Russia's Road to the Cold War* (Columbia UP: NY, 1979), pp. 41-42.
- (28) O. A. Rzhesheskii, *Vizit A. Idena v Moskvu v dekabre 1941 g. Peregovory s I. V. Staliny m i V. M. Molotovy m, Noviaa noveishaia istoria*, 1994. no. 3, s. 104-105.
- (29) モスクワ争奪戦へのロシア側の反攻は一二月五日に始まり、一二月半はまでにこの戦争で初めてドイツ軍を後退させた。スターリンは翌年一月に、反攻から休む間もなく攻撃を命じた。この攻撃は大失敗に終わった。A. M.

- Samsenov, Moskva, 1941 god: ot tragedii porazhenii k velikoi pobeде, (Moskovskii rabochii: Moskva, 1991), s. 172-182, 193-202.
- (30) Tam zhe, s. 119-120.
- (31) W. Averell Harriman and Elie Abel, *Special Envoy to Churchill and Stalin, 1941-1946*, (Random House: NY, 1975), pp. 160-161, p. 559.ハリマンはこの会話を自分が一九四二年八月一四日につけたメモによって再現している。この時の会話をハリマンから聞いたティーンは、スターリンの発言をより鮮やかに描いている。おそらくそれは、スターリンの発言のニュアンスをより明白に伝えていた。ティーンの回想によれば、「この時スターリンはハリマンに、「日本はロシアの宿敵 historic enemyであり、その最終的な敗北がロシアの利益に緊要だと言った。彼が意味したのは、この時のソ連の軍事的立場は参戦を許さないが、最終的には参加するとういうものであった」。John R. Deane, *The Strange Alliance*, (Indiana UP: Bloomington, 1973), p. 226.
- (32) A. Kirichenko, Niuansy «Man'chzhurskogo bit'skriga», *Znakom'ec' Japoniia*, no. 30(2000), s. 69.
- (33) Cordell Hull, *The Memoirs of Cordell Hull* (Macmillan: NY, 1948), pp. 1309-1311. ロシア側の証言として、当時通訳を務めたズレンニコフがより長いスターリンの発言を書き残している。Valentin Bereznev, *Kak ia stal perevodchikom Stalina*, (Dem: Moskva, 1993), s. 280. たゞ、彼の回想が正確かどうかは確認できない。
- (34) Sovetsko-amerikanskii otnosheniia vo vremena velikoi otechest'-vennoi voiny 1941-1945, t. 1, (Izd. politicheskoi literatury, 1984), dok. 213, s. 352.
- (35) A. Vasilevskii, *Delo vsei zhizni*, (Izd. politicheskoi literatury: Moskva, 1975), s. 552.
- (36) 参謀本部にいたシムチェメンコは、一九四四年九月末になって初めて、極東への軍の集中と確保について計算を準備するようスターリンに命じられたと記している。S. M. Shtemenko, *Generalnyi shtab v gody voiny* (Voennoe izdatel'stvo: Moskva, 1985), s. 374.
- (37) N. V. Eronin, *Strategicheskaja peregrupirovka sovet'skoi vooru-zhennykh sil*, (Moskva, 1980), これはオロシエロフ名称参謀本部アカデミー博士論文である。付録一(s. 108).
- (38) 油橋重遠『戦時日ソ交渉小史』(電ヶ関出版、一九七四)一七三ページ。

- (39) Pravda, 7 noia. 1944.
- (40) A. Vasilevskii, s. 555-559.
- (41) N. V. Eronin, 付録 17 (s. 128).
- (42) Kathryn Weathersby, Soviet Aims in Korea and the Origins of the Korean War, 1945-1950: New Evidence from Russian Archives, CWHHP, Woodrow Wilson International Center for Scholars, Working Paper No. 8, November 1993, pp. 7-8.
- (43) *Ibid.*, pp. 9-10, p. 13.
- (44) *Ibid.*, p. 6, 脚注 18.
- (45) 横手慎二「第二次大戦期のソ連の対日政策」『法学研究』第七一卷一号(一九九八年一月)参照。
- (46) 石井明『中ソ関係史の研究』(東京大学出版会、一九九〇)四ページ。
- (47) A. M. Ledovskii, SSSR i Stalin v sud'bach Kitaiia, (1999, Pamiatniki istoricheskoi mysli: Moskva), pp. 28-29. () に会談内容を示す外交文書が収録されている。元外交官の著者は特別にこの文書の閲覧を許されたのである。
- (48) 以下の論考で和田春樹東大名誉教授は、同じ個所を重視しているが、本稿とは異なり、スターリンはここでヤルタ協定の内容を宣言したとする。「領土の獲得の正当性を国際的に、何よりも米国に印象づけるために、日露戦争のうらみが強調されたと考えられる」と書いている。和田春樹「日ソ戦争」『スラブと日本』(弘文堂、一九九五)、一二九〜一三〇ページ。

本稿作成にあたっては、慶應義塾大学の福沢基金による在外研究の成果が利用されている。

本稿は筆者が慶應義塾大学法学部に勤務して以来、大いに教えを受けた山田辰雄教授の退職記念に捧げるために準備されたものである。筆者の怠慢で、期日までに間に合わなかったことを山田先生にお詫びする。二〇〇二年三月八日記す。